

金融資本の構造

野田 弘英

著者紹介

の　だ　ひろひで
野田　弘英

1941年 福岡県大牟田市に生まれる
1968年 九州大学大学院経済学研究科博士課程修了
現　在 埼玉大学経済学部助教授
専　攻 金融論，銀行論
著訳書 『ヒルファディング金融資本論入門』（共著，
有斐閣，1977年）
ブリングル『現代イギリスの銀行業』（共
訳，新評論，1975年）
『経済学史の方法と問題』（高木楊哉編，ミ
ネルヴァ書房，1978年）
『現代の貨幣・金融』（高木楊哉編，ミネル
ヴァ書房，1980年）他

金融資本の構造——『金融資本論』研究

（検印廃止）

1981年10月5日 初版 第1刷発行

定価 2800円

著　者　野　田　弘　英

発行者　二　瓶　一　郎

発行所 株式 新　評　論
　　　　会社

〒160 東京都新宿区西早稲田3-16-28

電話東京 (202) 7391番

振替 東京 6-113487番

落丁・乱丁本はお取替えます

印刷 凸版印刷

製本 清水製本

©野田弘英 1981

3033—330174—3177

Printed in Japan

金融資本の構造

金融資本の構造

——『金融資本論』研究——

野 田 弘 英

新 評 論

まえがき

ルドルフ・ヒルファディング (Rudolf Hilferding) の著書『金融資本論』(*Das Finanzkapital, eine Studie über die jüngste Entwicklung des Kapitalismus*, 1910) は、発刊と同時に「『資本論』の続刊である」(カウツキー)と激賞され、今日ではすでに古典的労作としての評価が定まっている名著である。だが他面、この書は、その難解さをもって知られた著作であって、その難解さのゆえに、しばしば流通主義的偏向を犯した謬論として批判され、内在的包括的研究がややなおざりにされてきたきらいがある。流通主義的偏向とも呼ばれてきたヒルファディング独自の方法によって捉えられた真実は何かということ、私はつねづね考えてきた。拙著においては、この古典を、その時代的背景との関連において捉えようとする試みがなされている。この大作は1905年にほぼ出来上り、1909年に完成されている。まさしくそれは世紀転換期の、独占形成期に生まれた理論であって、かかる過渡期の理論として『金融資本論』を理解することが、拙著の目的である。その時代の所産として古典的著作を読むことを抜きにしては、その書の現代的意義を明らかにすることもできないであらう。

もっとも、この力作の複雑な論理構造を解明していくためには、それを読む側の論理構造をあらかじめ示しておかねばならない。第1章と第2章においては、金融資本の構造に関する私自身の理解の概略が述べられている。それをふまえて『金融資本論』の理論的特質を先取り的に、総括的に論じているのが第3章である。第4章以下の諸章は、この著書を各論的に論じている。第3章を除けば、他の諸章は全てすでに発表された論文から成り立っていて、各論的な部分についてはその後私の見解が多少変化してきた個所もあるが、発表当時の論説をほぼそのまま収録している。その意味では本書は私の『金融資本論』研究のこれまでの足跡を記したものである。各論文の発表以後も、すぐれた幾つかの著書・論文を拝見したが、それらについては機会を改めて取上げさせていただくことにしたい。

遅々とした歩みであるとはいえ、浅学の身で研究を続けてこれたのは、多くの方々のご教示があったからである。ことに高木暢哉先生には学部ゼミ以来の長いご指導をいただいている。報いうるだけの成果を挙げえていないのは、心残りであるが、致し方がない。出版については新評論の二瓶一郎・藤田智隆両氏にご迷惑をおかけした。記して謝したい。

1981年6月

野田 弘英

初 出 一 覧

各章の発表時の論文名と掲載誌は次の通りである。

- 第1章——「鑄貨と銀行券」，埼玉大学『社会科学論集』第46号，昭和55年12月。
- 第2章——「銀行制度と株式会社」，同上誌，第47号，昭和56年3月。
- 第4章——「通貨と信用」，同上誌，第45号，昭和55年3月。
- 第5章——「資本信用に関する一考察」，同上誌，第43号，昭和54年3月。
- 第6章——「ヒルファディングの擬制資本論(1)」，『熊本商大論集』第36号，昭和47年4月。
- 第7章——「独占形成と株式会社（上）」，同上誌，第46号，昭和50年9月。
- 第8章——「独占形成と株式会社（中）」，同上誌，第49号，昭和51年7月。
- 第9章——「独占形成と株式会社（下）」，埼玉大学『社会科学論集』第41号，昭和53年3月。
- 第10章——「金融資本概念に関する一考察」，熊本商大『海外事情研究』第3巻第1号，昭和50年3月。

目 次

まえがき

前篇 金融資本の構造

第1章 鑄貨と銀行券	15
1 紙幣減価論の背景	15
2 銀行券の現金化過程	24
3 「金本位制の自動調節作用」の変化	34
4 結びに代えて	42
第2章 銀行制度と株式会社	44
1 資本の前貸と貨幣の前貸	44
2 信用制度と株式流通	51
3 所有の社会化と金融資本の支配	58

後篇 『金融資本論』の研究

第3章 『金融資本論』の理論的特質	69
1 二つの独占観	69
2 二系譜の理論展開	73
3 結 び	83
第4章 通貨と信用	85
1 信用創造論の台頭	85
2 資本集中と信用制度	90
3 社会的流通価値説	96

4	利子率変動論と流通信用論	105
5	結 び	110
第5章	流通信用と資本信用	112
1	はじめに	112
2	流通信用の規定	119
3	資本信用の規定	129
4	資本信用と擬制資本	135
5	結 び	142
第6章	ヒルファディングの擬制資本論	144
1	一つの係争点	144
2	後藤泰二教授の所説	149
3	機能資本と擬制資本	154
第7章	株式会社の支配機構	164
1	はじめに	164
2	『資本論』以後の論争	165
3	『金融資本論』の解答	172
4	「創業利得」範疇の発見	183
第8章	独占形成と金融資本	191
1	株式会社と独占形成	191
2	資本の金融資本への転化	207
3	独占成立期の現実	218
第9章	金融資本の二側面	227
1	金融資本理論の二側面	227
2	銀行独占と金融寡頭制	233

3	「独占化」の思考.....	240
4	結びに代えて	246
第10章	金融資本概念に関する一考察	249
1	はじめに	249
2	金融資本の典型	250
3	『金融資本論』と『帝国主義論』.....	258
4	結びに代えて	269

索引 (273~278)

前 篇

金融資本の構造

第1章 鑄貨と銀行券

1 紙幣減価論の背景

インフレーションの本質は、通常、流通必要量をこえた紙幣の過剰発行による、事実上の価格標準の切下げであると規定されている⁽¹⁾。流通必要量や価格標準としての金を想定するということは、価値尺度としての金を前提することである。しかし今日のインフレーションの環境をみると、ドルの金交換停止、変動相場制への移行、金の投機的価格変動など、貨幣としての金の地位を否定するような諸現象が広まっていて、金の価値尺度機能を語ることは著しく困難になっている。仮りに語りうるとしても、その価値尺度機能とは甚しい歪曲をうけ、いくたの媒介過程を経て迂回的に作用しうるにすぎぬものであろう。だが少なからぬ現代インフレ論説において、そうした媒介過程の説明もなく、しばしば自明のこととして貨幣としての金が前提されている根因は、マルクスの紙幣減価論に帰着するといえよう。後論のごとく、かれは、国家紙幣の専一的流通を想定しつつ、たとえ紙幣が限度をこえて発行されても、それは一枚の紙幣の代表金量の低下をもたらずにすぎないと、述べている（岩波文庫版『資本論』(-)223～4ページ、昭和44年）。けれどもここに至るまでの論述の流れからみれば、紙幣減価論においていわば突然にかれの論述は飛躍しているかに思われてならない⁽²⁾。その飛躍の意味と背景とを、本章ではまず考察したい。そのためには、ひとあたり価値尺度、価格標準、流通手段のあいだの諸関係にふれておかねばならない。

貨幣の価値尺度機能は、商品世界へ価値表現の材料を提供し、商品価値を、質的に等一で量的に比較できる大きさとして表示することにある。価値尺度たる貨幣は、商品の内在的価値尺度＝労働時間の現象形態であるから、観念的形態で機能する。商品の価格＝貨幣形態は、その価値形態一般と同じく、商品の実在的な物体形態とちがった理念的または観念化された形態にすぎない。しか